

OLIVE-SPIRIT

関東学院学報 オリーブ・スピリッツ

March. 2021
No. 59



関東学院

コロナ禍から見つめる教育と未来

今なお続く新型コロナウイルスの世界的な感染拡大。

かつてない事態に直面する中、

学院として安全かつ創造的な「学びの場」をいかに実現していくのか。

学院の10人のリーダーに話を聞きました。

ポスト・コロナ時代の共生社会に寄与する学院教育

先行きが不透明な時代において指針となるビジョンを持ち、今とその先の社会へと目を向けチャレンジを続けます



学校法人 関東学院 理事長
増田 日出雄

1962年関東学院大学経済学部経済学科卒業、日本揮発油株式会社（現日揮）入社。
2002年同社代表取締役副社長、
2006年同社代表取締役副会長就任。
2009年7月学校法人関東学院常務理事・評議員を経て、
2013年4月学校法人関東学院理事長就任。

コロナ禍での経験を教育に活かす

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、各校においては年度初めより臨時休校・休園を余儀なくされ、オンライン等による遠隔授業を実施する状況が長く続きました。特に1年生にとつては、入学したものの学校やキャンパスに来ることすら叶わず、新しい仲間や教員と直接会えないことに戸惑ったのではないでしょう。そんな中でもオンライン環境を準備して授業に臨んでくださった学生や子ども達、保護者の皆様に心より感謝申し上げます。同時に教職員の皆様の多大なる努力に敬意を表したいと思います。

関東学院では各校が10年後のあるべき姿を描いた「未来ビジョン」を策定し、数年前から政策的予算を充てて教育環境の整備を進めてきました。それにより大学以下の各校において学習支援システムやタブレット等の導入など、オンライン教育の土台がある程度構築できていたことで、学校によつて多少の差はあるものの、学院全体としては他所と比べてスムーズに遠隔授業へ移行できました。年齢や状況に応じて郵送で資料をやり取りする方法も取り入れながら、休校中に一定レベルの教育を継続できたことは、私達の推進する未来ビジョンへの政策的投

資がうまく実った成果だと感じています。

オンライン授業のメリットの一つにオンラインデマンドがあります。講義を繰り返し閲覧できることは、個人が知識を得る上では非常に有効です。しかしながら、オンラインが全て正解かと言えばそうではありません。現段階では教員のICTスキルに差があることは一つの課題です。また、学内で仲間と出会い、ディスカッションし、リーダーシップを発揮して個人の能力を開発していくためには、やはり対面授業やゼミナール、課外活動での経験が不可欠です。今回のコロナ禍はオンライン授業のメリットや課題を見つめるきっかけとなりました。現在は対面授業や課外活動を再開していますが、さらなる感染拡大に備える意味でも、オンラインと対面の良い部分を取り込み発展させ、教育の幅を広げていきたいと思っています。

社会と共に進化する学院像

学校は知識を得るための場所ではありません。これからは共生の社会であり、世界あるいは地球全体が成り立っているような行動が求められる時代です。校訓「人になれ奉仕せよ」が示すように、人のため社会のために尽くせる

人を育てていくことは、キリスト教を土台にした教育を標榜する私達の大きな使命です。コロナ禍が続く今、改めてその重要性を感じています。

私は今こそ社会全体が変わる時だと思っています。今回のコロナ禍でAI導入やICT化を筆頭とする社会の変化はより加速するでしょう。それならば、社会の流れに遅れを取らないよう、学院も変化し、新しいことに挑戦していかなくてはなりません。大学は再来年、関内へ進出します。大学卒業までに培った知識だけで働き続けられる時代が終わりつつある中、これから求められるのは社会人への教育プログラムであり、欧米ではもはや一般的なことです。関内は社会人が仕事後に勉強するにも最適な立地であり、学院にとつては非常にやり甲斐のある挑戦だと思っています。

2040年には18歳人口が約25%減少すると推計されています。学院が今後も発展していくには、若い職員達が若い目で社会がどう変化していくかを見定め、積極的に行動していくことが必要です。そういう学院にしていくなために私自身も力を尽くし、新たな世代へとバトンを引き継ぎたいと思っています。

コロナ禍を利己主義から利他主義への転換点に

様々な問題を抱える社会に「連帯」を呼びかけ、キリスト教学校としての使命を果たしていきます

分断と排外主義に打ち克つために

はじめに新型コロナウイルスによつて有形無形の影響を受けた全ての方々に對して、心からお見舞いを申し上げます。また、命を亡くされた方々とご遺族の上に、神からの慰めと平安をお祈りいたします。

新型コロナウイルスは、世界的な流行が始まつて一年以上が経過した今も猛威を振るい、予断を許さない状況が続いています。歴史を振り返れば、人類は何度もパンデミックを経験してきました。世界では今、社会の分断を背景に、自国第一主義や排外主義が横行しています。そこに今回のようなパンデミックが発生したことで、人間の根元的なエゴイズムが表面化し、分断や差別がさらに顕著となることが懸念されています。そうした状況をどう受け止め、どう乗り越えていくかという問題は、一部の専門家や政治家に委ねるものではなく、今を生きる私達一人ひとりに向けられた問いであることを忘れてはいけません。そして、こういう時代だからこそ、キリスト教に基づいた教育を掲げる学院の内実が問われていると感じています。

昨年来、私はコロナ禍に関する多くの学者・識者の論説や言及を眼にしてきました

した。中でも最も感銘を受けたのが、NHK教育テレビの対談番組におけるフランスの思想家ジャック・アタリ氏の主張です。内容については以前に学院ホームページにも寄稿しましたが、その一部を改めてご紹介したいと思います。アタリ氏は「パンデミックの中では連帯のルールが破られ、利己主義が横行し、経済的な世界においても孤立主義が高まる危険性が強く、排外主義的なポピュリズムが台頭している。そうした中で、バランスの取れた連帯の輪を広げる必要性があるが、今回の危機に直面して、人類に対して利他主義への転換を求めたい。：パンデミックという深刻な危機に直面した今こそ「他者のために生きる」という人間の本質に立ち返らねばならない」と提言しています。自分や自国さえ良ければという発想から、他の人々のために生きるという発想の転換が起こらなければ世の中は成立していかないと示唆であり、これはキリスト教の「他者を愛する」「他者のために生きる」という教えとも深く関連しています。

聖書のメッセージを語り継ぐ

私が大事にしている聖書の言葉に「自分を愛するように、あなたの隣人を愛せよ」という有名な一節があります。「自

分を愛するように」とは何を意味するのか。神の前では、人は自己中心的な弱い存在に過ぎません。そんな自分でも神や他者から愛され、受け入れられていることに気づかされた時、初めて自分自身をかけたえのない存在として愛することが可能となります。と同時に、隣人をもかけがえない存在として受け入れ、愛することができるようです。すなわち「自分を愛すること」と「隣人を愛すること」は深いところで一つになるのです。コロナ危機に直面する今、地球で起きている紛争や環境問題、パンデミック等、人類共通の様々な課題を一緒に解決していくために、誰もが静かに立ち止まつて自分自身を見つめ直し、世界の連帯性や共生について考える機会を得ることを願っています。

さて、昨年はコロナウイルスが感染拡大する中で、学院各校の学長、校長、園長、我々役員等が何度も集まり、互いに情報を共有し、時には労い合い、心を一つにして対応に当たってきました。こうした連帯感が今後の学院教育の中で生かされることを期待しています。そして、学問的な知識を授けるだけでなく、人生を生きていく上での軸となる聖書の普遍的な価値観を語り継ぐ使命を果たし、キリスト教学校としてのメッセージを内外に発信し続ける学院でありたいと思います。

時代に合った新しい働き方への転機に

緊急時の業務継続にも対応できる新たなルール作りを進めていきます



学校法人 関東学院 理事 法人事務局長
山野 香
関東学院大学経済学部経営学科卒。1981年奉職。
学長室（現大学経営課）、教務課、人事課、国際
センター事務室（現国際交流推進課）等を経て
2017年総務部長。2018年から現職。

職員の努力と理解に支えられて

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、最初に職員に向けて文書を知したのが昨年2月27日です。その後は社会の逼迫感が日ごとに増し、各校では休校が長期化したまま新学期を迎えることとなりました。先が見えない状況に職員達も不安が大きかったと思いますが、各校の先生方が考える教育やオンライン授業等を実践するため、それぞれの現場で懸命に対応に当たってくれました。

私自身は連日、文書という形で情報を周知すると共に、職員の安全をどう守りながら業務を継続するかということに思いを巡らせてきました。特に最初の頃は一人も感染者を出してはいけないというプレッシャーが非常に大きく、これまでにない発想で働き方を根本から変えることが急務と感じました。そこで時短勤務や在宅勤務を導入するにあたり、本来は職員として遵守すべき就業規則を一旦取り払うと共に、遅刻・欠勤等の取り扱いを一切しないことにいたしました。正直、そこに至るまでには様々な葛藤がありましたが、総務や人事など各方面の方々のご意見もうかがいながら、職員の安全と業務の継続を最優先し、思い切った決断させていただきました。一方で、施設管理部門、大学等の施策や支援を遂行する

部署など、在宅勤務ができない職員にはかなり無理をしていたのだと思います。また、派遣職員や臨時職員の方々は休業補償を受け入れていただくなど、本当に多くの方々のご理解によって危機を乗り越えてきたのだと感じています。

本来ならば様々な制度設計をし、周知期間を設けた上で在宅勤務等を導入すべきですが、緊急時においては「とにかく各自ができることをしてください」とお願いするしかなかったのが実情です。逆に言えば、これまでの常識が全く通用しない中で、私を含め職員一人ひとりが大きな目的に向かって主体的に行動する意識が醸成されたと思います。幸いだったのは、2019年末に自宅のパソコンから各校の業務用システムにアクセスし、職場と同じ環境で仕事ができる環境を整えていたことです。双方方向の意思伝達ツールもこの機会に一気に活用が進みました。

多様な働き方への改革を推進

私はゴールデンウィークの頃が最も精神的に辛かったですね。緊急事態宣言が解除され、徐々に日常の風景が戻ってきた時は本当にうれしかったですし、日常こそを大事に頑張らないといけないのだと再認識しました。今後の課題としては、

本当の意味での在宅勤務の制度を作るこ

とが挙げられます。多くの企業がそうであるように、「職場に来ること」仕事をすること」という概念が崩れつつある今、在宅勤務に対応した業務管理を考えていく必要があります。そのために緊急時だけでなく普段から、例えば小さなお子さんや要介護者ご家族にいる職員など、範囲を限定しての在宅勤務制度を導入することを検討しています。なおかつ、そうした方々が在宅での業務管理を実感してくださることで、今後の感染拡大や緊急事態の際にそれが職員全体に自然と広がればと期待しています。これらはコロナ禍にかかわらず、職員が働きやすい環境を作るためにも必要な改革です。

最後に、職員の皆さんがそれぞれ自分にできることを考え行動してくださったことを心から感謝いたします。その経験を平時における働き方のパラダイムシフトに繋げていただけたらうれしく思います。私としても突き動かされるままに今日までやってきましたが、その評価は今の職員の皆さんの声として、あるいは将来的に見えてくる部分であろうと思います。コロナ禍は未だ収束が見えませんが、皆で乗り越えたと言えるように、これからも職務に務めたいと思います。

「学びへの意欲」を失わせないために

学生達に本当に必要な教育は何かを第一に考え、コロナ禍での授業に取り組んでいきます

様々な授業方法や支援を検討

2020年度は新型コロナウイルス感染症の拡大により、春学期の始業を一月延期し、5月半ばからオンライン授業でスタートしました。学生対応の全てを、電話やパソコン画面を通したリモートで行うという初めての経験に、教職員一同まさに手探りの状態でした。オンライン授業は試行錯誤の繰り返しで、当初は学生達にも負担を掛けたかと思っています。また、国の緊急奨学金制度に加え、大学独自の緊急奨学金、学費納付期限の延長等の経済的支援を行ってきました。特に最大2年間学費の支払いを猶予したまま在籍、学修を続けることができる長期履修制度を新設し、経済的理由で休学や退学を余儀なくされ、学びの継続を諦めてしまいう学生を一人でも少なくすることを第一に考えました。決して最善で十分とは言えませんが、コロナ危機の中で本当に支援を必要とする学生を最優先にした、相互扶助の理念に基づいた支援であったことをご理解いただければと思います。

入構制限中も、どうすればキャンパスでの大学生活、対面での授業を再開できるかを常に模索していました。オンライン授業は、感染防止の観点から言えば一番確実な手段で、春先にこれ以外の選択肢はなかつ

たと思います。しかし、実験や演習など対面であれば十分な学修効果が得られない科目もありますし、講義科目であっても直接、学生達に語りかけたいという教員としての本質的欲求もありました。7月後半、一部の科目で対面授業を再開した時に学生の口から出てきたのは「こんなに教室で勉強したいと思ったことはなかった」という言葉でした。もちろん、学生達の捉え方は様々ですが、全体を代表する声とは言いませんが、普段なら照れて「勉強したい」とはなかなか言わない学生達が、「学びの意欲」を明確に表明したことに感激しました。秋学期からは、できる限りの感染対策を行い、オンライン授業と対面授業の併用、多少の制限はありますが課外活動も実施しています。

学生の安全を考えてオンライン化することも正しい選択です。オンラインの特性を利用した効果的な授業方法があることもわかってきました。物理的なキャンパスから完全な対面授業が難しいという現状もあります。どの選択肢であつても私達は常に目の前の学生達に対して本当に必要な教育は何かを考える責任があります。コロナ禍において、意図しない壮大な社会実験を強いられているように感じられますが、4年後の学生達の成長を考えた上で、リスクを避けることも、

学びの環境を自ら守る行動を

リスクを取って活動することも、両方とも責任の取り方だと考えています。様々な意見があると思いますが、私自身は判断基準をそこに置くべきだと考えます。

学生は行動を制限できないからキャンパスに来させないという大学もあるようですが、それは無分別な大人も同じです。どんなに気をつけても感染リスクはありますが、キャンパスに入らなければ良いというわけではありません。学生達にお願いしたいのは、学ぶ環境、即ち自由に教室で学べる環境を守るために自らを律して欲しいということです。無頓着や無配慮によって友人の学ぶ環境を壊す行動は明確に責められるべきことです。

新年度からは原則として対面授業を行う方針です。同時に、感染状況次第では、いつでもオンライン授業に移行できるような準備は整えています。この1年間は我々教職員にとって、学生や授業に対する考えを見つめ直す機会になったと思っています。その姿勢を学生達は常に見ています。その目は限りなく正直であり、こういう時だからこそシビアであることを、我々教職員は覚えておかなければならないと思います。



関東学院大学 学長
規矩 大義
1993年九州工業大学大学院工学研究科博士後期課程修了。
横浜国立大学助手を経て、官民の防災研究の職場を経験。
2002年関東学院大学工学部着任。
2013年12月より関東学院大学 学長。2019年再任（3期目）。
専門は地盤防災工学。

人との触れ合いを今こそ大切にしていきたい
 守るべきは守りながら新たな教育の価値を創造し、
 コロナ禍においても彩りのある学校生活を実現します

より良い教育環境の構築へ

昨年2月、通学経路でもあるJR横浜
 駅東口が、ダイヤモンド・プリンセス号の
 乗客の解散場所となった頃から、コロナが
 身近になった感じがします。2月1日か
 らの中学入試と恒例の中学合唱コンク
 ールはどうにか切り抜けましたが、3月1
 日の高校卒業式は規模を縮小し、最後の
 晩餐に因んだ午餐会は中止としました。
 日々判断を迫られ緊迫感が増す中、全国
 一斉休校の要請には戸惑いを隠すことが
 できませんでした。6月の学校再開後は、
 生徒の安全と安心を第一に考えた施策を
 講じつつ、現在は「コロナに服して屈せず」
 との心境です。見えない相手と戦うこと
 はできませんが、工夫次第で負けないこ
 とはできるのではないかと思います。

休校期間中、最初は教材や課題を郵送
 し、2回目以降は「KGウェブ」という
 保護者との連絡用ツールを利用して配信
 しました。学習面では、本校のオンライ
 ン環境が必ずしも万全ではなく、その点
 に関しては今後の大きな課題となりまし
 た。各家庭のICT環境にも差異があつ
 たことから、多くの生徒が保有する
 iPhone向けの配信を優先的に行つ
 たため、パソコンやタブレットを利用す
 るオンライン授業の導入が遅れました。

学校再開後は、対面授業により理解を深
 め、夏休みも2週間に短縮して進度を取
 り戻しています。
 後期が始まった10月には校時表をもと
 に戻しました。11月から学年礼拝は学年
 ごとにグレースェット礼拝堂で守つていま
 す。昼食は教員の指導のもと教室で一斉にと
 ります。余談ですが、教員が昼食の開始
 時間に遅れて教室に行ったところ、生徒
 が誰一人箸をつけていなかったという報
 告もあり、コロナ禍で生徒達も緊張を強
 いられていることがわかります。

今後は対面授業の継続が困難な場合に
 備え、オンライン授業への移行が容易に
 なるよう、教員研修を行つていきます。ま
 た新年度の中学1年生は各家庭に専用端
 末をご用意していただく予定です。精神
 面のケアでは、生徒・教職員共にストレ
 スチェックや各種アンケート調査で実態
 把握に努めています。

成長の種となる経験を

人との触れ合いから得られる体験を大
 切にする本校では、コロナ禍にあつても、
 学校生活に彩りを添える部活動や行事を
 大事にしたいと考えています。部活動は
 7月以降再開しています。コロナの影響
 で成果を発揮する機会が減っているのが

ICT活用とオンライン授業

一斉休校を機に日本の教育の問題点が浮かび上がる中、
 ICT先進校として「主体的な学び」を追求します

コロナに負けない教育インフラ

日本の教育におけるICT活用率は、
 OECD諸国の中で最下位です。この危
 機状況をコロナ禍で初めて実感した方
 も多いのではないでしょうか。本校は2
 014年から急展開でICT環境の整備
 を進めてきました。2015年に校内L
 ANや電子黒板を設置し、全教員にタブ
 レットを支給して授業での活用を促すと
 共に、授業改革を目指して研修を重ねて
 きました。生徒には2018年に中2か
 ら高1にクロームブックを自己負担で導
 入し、年次進行で2020年度に中1に
 も所持させました。

コロナ禍により昨年4月から一斉休校
 を余儀なくされた際、既にパソコンを導
 入していた学年はオンライン授業への移
 行はスムーズでした。中1・2年生に対
 しては急遽、導入時期を前倒しし、中・
 高の全学年でオンライン授業を可能にし
 ました。グーグルのクラスルームを使つ
 て自宅から朝のホームルームに集ること
 から始まり、授業では教員が教材や資料
 を配信し、双方向型での授業を行い、課
 題のやり取りや解説、質疑応答、グル
 プワークなども全てオンライン上で実施
 しました。日頃から授業でICTを活用
 していたので、対応も早かったですね。

悩みではありますが、美術部や音楽系ク
 ラブの発表の場としてYouTubeでの
 配信を行う計画など、様々なサポートを
 しています。行事は、大勢が集まるかん
 らんさい（文化祭）等を中止とした一方、
 校内芸術鑑賞や各種校外行事を実施して
 います。宿泊を伴う行事や合宿等も、密
 にならない部屋割りや日程を組むなど、
 社会の状況も見ながら検討していきます。

今回のコロナ禍で見えてきたことがあ
 ります。それは、この世の出来事（検温・
 手指消毒・マスク着用）に無関心でいる
 と、他の人の自由や権利を奪うことにな
 りかねないということです。そしてコロ
 ナと共に生活することに苦しさを感じる
 時、私達に新しい息を吹き込んでくださ
 る神様がいらつしやるということを、私
 達は改めて覚えたいと思います。コロナ
 禍がいつまで続くのか、それは誰にもわ
 かりません。ありふれた言葉ですが「希
 望」を大切にしたいですね。中学生や高
 校生が将来に対する希望を持ち続けてい
 くためにサポートすることは、私達大人
 の責任でもあります。そのために、学校
 として生徒を温かく迎え入れると共に、
 保護者の方と協力しながら、その成長に
 寄与していきたいと思っています。

く、ICTを通して知識を活用する知恵
 の学びとも言えます。

改革の一環として2018年にクロ
 ームブックと同時に導入したのが自走型学
 習システム「すらら」です。個々の到達
 度や理解度をAIが判断し、学年を遡つ
 て再学習したり、どんどん先に進んだり、
 学年に縛られず自分のペースで学べま
 す。学内や自宅で自由に取り組めるのも
 利点です。教員の労力も削減できるため
 働き方改革にも繋がります。

4、5月のコロナ禍でのオンライン授
 業を振り返り、アンケートを教員に実施
 しました。進捗度、深化度、積層度、理
 解度の4項目においてオンライン授業と
 平常授業を比較したところ、進捗度と積
 層度はオンラインの方が上でした。これ
 は一つの成果です。効果が実感できたこ
 とで、教員同士がICTツールの活用方
 法を相談しあうなど、新しいコミュニ
 ケーションも生まれています。

コロナ禍は大変なことですが、日本の
 教育現場にはICT導入のスイッチとな
 りました。本校は先進的に、学習の個別
 化と主体的な学びをさらに進化させてい
 きます。既成概念に囚われず、どんな学
 びと学び方が必要なのかを見つめます。
 新しい学習観を生徒や保護者の方々にも
 一緒に考えていただければと思います。



関東学院六浦中学校・高等学校 校長

黒畑 勝男

1983年北海道立高等学校(英語科専任教諭)
 1997年立命館慶祥中学校・高等学校(教頭)
 2007年酪農学園とわの森二愛高等学校(副校長)
 2014年より関東学院六浦中学校・高等学校 校長。



関東学院中学校高等学校 校長

富山 隆

青山学院大学卒業後、1978年関東学院中学校高等学校に
 国語科教諭として着任。
 以来、40年以上に渡って生徒の指導に尽力。
 2003年より関東学院中学校高等学校 校長。

「今できること」を大切にして新たな教育を模索

コロナ後の社会に不可欠な情報活用能力と前例のない課題に向き合う力を育みます

全年でオンラインを活用

昨年2月27日の突然の休校要請には正直、非常に困惑しました。とにかく3月以降は子ども達を休ませ、そのまま年度をまたいでの休校が3ヶ月続くことになりました。

4月には各家庭に新しい教科書やプリント等を発送した上で、最終的には全年でオンライン学習を実践しました。その方法は学年によって様々です。5・6年生には4月開始時点で一人1台タブレット端末を配布し、学習アプリを通じて授業動画や課題をやり取りして学習を行いました。1〜4年生は「まなびポケット」というプラットフォームを通じてメッセージや動画を視聴した上で、課題に取り組んでもらいました。また、礼拝、体育の実技、ライブラリーの教員による読み聞かせやクイズ等の動画も配信し、子ども達が自宅で過ごす時間の充実に努めました。教員も連日、短時間の動画で授業をどう伝えるかを試行錯誤して、よく取り組んでくれました。

休校中にある学年が子ども達を励ますために作った動画に対し、子どもが投稿した「久しぶりにたくさん笑いました」というコメントを見た時は、胸に込み上げてくるものがありました。自宅で一人

黙々とすごす毎日、そこに足りないのは「笑い」です。友達と笑ったり、息抜きする時間がないことは、皆にとってほんとうに辛かったのではないでしょうか。改めて子ども達には友達が、先生が、学校が必要だと感じました。

緊急事態宣言が解除され、6月には最大限の感染対策を施して学校を再開し、分散・時差登校を経て徐々に通常授業へ戻していきました。教員は少し早めに出勤し、毎朝子ども達を教室で迎え、体調確認や手洗いを指導し、密にならないよう見守っています。

今ある日常への感謝を忘れずに

本校は今年度から数年かけて一人1台タブレットを導入する計画でした。それを前倒しし、5・6年生は4月、4年生以下も8月以降に順次配布を完了しました。配信される写真や動画を見たり、メモを記入したり、グループでページを共有して意見をまとめたり、今では日常で当たり前に使う文房具になりつつあります。

行事については、今の状況で何ができるか、どんな工夫をすればできるかを考えて可能な限り実施しています。例えば運動会では中高のグラウンドを借り、競技者以外は教室でライブ映像を観て応援し

ました。ブックフェアや読み聞かせの会など、本校が大事にする読書イベントも密にならない対策をして実施しています。

今は「これまで通り」「去年と同じ」という言葉は通用しません。コロナ後の社会を生きていく上で、未知のものに対応する力を子ども達に育んでいきたいと思っています。また、こういう時だからこそ、人のことを思いやつてすごしてほしいと思います。コロナは誰でもかかり得る感染症です。感染自体は悪いことではないこと、そして多くの人達が苦勞して皆の生活を支えてくれていることを知ってほしいと思います。

休校が明けて以降、毎朝、昇降口で子ども達を迎えています。ある日、いつものように昇降口に行くとき誰も来ていない、という夢を見ました。それほど気が張り詰めていたのかと自分でも驚くと共に、今、子ども達が来てくれているのはこんなにもうれしいことなのだと実感しています。学校としては常に最大限の対策を講じてはいますが、保護者の皆様から見ればまだまだ不安もあるかと思えます。それでも毎日子ども達を送り出してくださることに感謝の気持ちで一杯です。そして子ども達にも「今日も来てくれてありがとう」と伝えたいですね。

今こそ児童や保護者の心に寄り添った教育を

従来からの教育資源ときめ細かいサポートが緊急時に活かせたことは今後の大きな糧です

アナログ+デジタルで繋がる授業

予想だになかった新型コロナウイルスの感染拡大は、健康や命に関わる問題であり我々教員も最初は戸惑いましたが、とにかく児童、教職員、外部スタッフ、そしてそのご家族の健康と安全を最優先にしようとして一致協力して対策を進めました。政府の要請を受け昨年3月2日から臨時休校となりましたが、卒業式と入学式だけは規模を縮小して実施しています。入学式を行った4月7日の夜に緊急事態宣言が発令されたのですが、新1年生にとってたった1日だけでも制服を着て登校し「小学生になったんだ」という気持ちの切り替えができたことは、保護者の方からも安堵の声が聞かれました。

5月31日まで続いた休校期間はアナログとデジタルを併用して学習を行いました。学級通信や課題等をレターパックで各家庭に郵送すると共に、課題に取り組むための授業動画を配信して解説を行い、返送されたプリントを添削します。また、ホームページ上で体育や理科実験の動画を配信したり、ビデオ会議アプリ「Zoom」を使ったホームルーム（朝の会）では教員と児童がオンライン上で顔を合わせ、健康状態や学習状況の確認やゲームを通じて心の安定を図りました。小学

生なので長時間の集中が難しいことや眼への影響を考慮して、授業動画は15分以内とし、全て校長と教頭が内容をチェックした上で配信しています。

学習以外でも、担任から一人ひとりに手書きの「ラブレター」の郵送、各家庭への電話、誕生日を迎える児童には校長からパスデーカーを送るなど、児童や保護者の気持ちがあふれでも和らぐよう努めました。また、放課後預かり「カナン」を朝8時から夜7時まで運営し、主に医療機関などコロナ禍でも在宅勤務ができないご家庭の児童をお預かりしました。少人数制だからこそ緊急時でもきめ細かいサポートができることは本校の強みでもあります。

他者との関わりを考える機会に

6月からは段階的な分散登校、8月には夏休みを経て平常授業が始まりましたが、小学生にとって友達と距離を保つことはなかなか難しいものです。それでもマスク、手洗いやうがい習慣はもちろん、友達や先生とエアタッチでコミュニケーションを取るなど、子ども達なりに工夫しながら学校生活を楽しんでくれています。今回、学院内の各園各校と連携して対応策を協議したり情報を共有でき

たことは非常に有り難かったですね。感染防止対策にご協力くださっている校医さんや学校薬剤師さんをはじめ、学校運営が多くの方々を支えられていることも改めて感じましたし、こうした機会に他者との関わりを子ども達に考えてもらうことも大切な教育だと思います。

本校は4年前に自動車送迎ロータリーを整備しましたが、登校再開後は利用者が大幅に増えています。また、昨年度後半から授業を持たない非常勤教員を複数採用し、主に低学年を対象に、学校生活への不安や授業に苦手意識を持つ児童に寄り添ってサポートする体制を整えています。こうした従来からの取り組みがコロナ禍では非常に活きました。これからもコロナウイルスとの共存は続きます。保護者の方には不安を抱え込まずに相談していただきたいですし、新たなニーズには学校としてできるだけ応えていきたいと思っています。そして新年度以降も気を緩めることなくウィズ・コロナ時代の新しい生活様式を続ける一方で、この1年間十分にできなかった行事等も可能な範囲でどうすれば実施できるのか、教職員一同が力を合わせ、子ども達とも一緒に考えていきたいと思います。



関東学院六浦小学校 校長
澤 章敏

横浜市出身。早稲田大学大学院文学研究科博士後期課程単位取得退学。
1990年関東学院六浦中学校・高等学校に社会科教諭として着任。
2005年から2011年非常勤講師として関東学院大学の教職課程担当。
2008年関東学院六浦中学校・高等学校の教頭に就任。
2017年4月より関東学院六浦小学校 校長。



関東学院小学校 校長
岡崎 一実

横浜国立大学大学院教育学研究科修士課程修了後、神奈川県内の公立小学校で教諭を務める。
平和学園小学校の教頭、校長を経て、
2012年より関東学院小学校 校長。

変化を怖れず常に前へと歩んでいける園へ

「今まで」ではなく「これから」に思いを馳せて、新しい園のあり方を考える時として・・・

コロナ禍で新たな試みを開始

新型コロナウイルスの影響により、行事の見直しや対策を始めたのは昨年2月頃です。卒園児のお別れ遠足で訪れたズーラシアが、その翌日から臨時休園となった際にはウイルスが私達の身近にじわじわと迫ってきたことを実感しました。3月以降は大人数が集まる行事は当面中止となりましたが、卒園式は予防策を徹底して実施しました。参加人数や時間を縮小しての開催でしたが、保護者の方々の努力と協力により、心に残る素晴らしい式ができたことを感謝しています。

4月になって状況が悪化する中、間もなく園児には登園自粛をお願いし、保育も保護者の職業を限定しての受け入れとなりましたが、緊急事態宣言が解除されてからは登園するお子さんを徐々に増やし、平常の状態へ戻していきました。しかしその後も保護者を含めて外部の方は園内への立ち入りを制限するなど、ご理解とご協力をいただきながら活動を行っています。

園では昨年度、スマートフォンで24時間情報を送受信できる「保護者連絡システム」を導入しましたが、これがコロナ禍での情報共有に大変役立ちました。また、昨年3月に初めての試みとして、卒園式に参加で

きないご家族のために、式典の同時配信を行いました。保護者会を開催することもできなために、撮影した映像を一定期間配信して見ていただいたり、入園希望者向けに園の活動を紹介する動画を配信するなど、オンラインを積極的に活用しています。園でも数年前から法人が推進してきたICT化が、コロナ禍によって一気に進むことになりました。

新しい日常を創るために

私達にとって苦渋の決断だったのは、感染リスクの観点から運動会などの親子参加の行事を中止したことです。皆様が楽しみにしている行事だけに、この決定に関しては本当に様々なご意見をいただきました。コロナ禍において、園としては行事に全てを集約するのではなく、日常の保育の中で子ども達が心から楽しめるよう工夫すると共に、それを保護者の方々にお伝えするために、今できることに力を尽くして、努力を非常にしてきた1年だったと思います。しかし、「伝える」努力はしたけれども、その思いがきちんと「伝わった」のかと言えば、それは今後の課題だと感じています。オンラインによって情報を伝えやすくなりましたが、私達の判断をポジティブに受け止め

ていただくための取り組みは常に考えていかなければいけないでしょう。

また、食育を大切にするこの園では、年長になるとランチルームでバイキングスタイルの給食を実施していました。現在は感染防止の観点から、給食は先生達が配膳をし、各教室でできるだけ3密を避けて取っています。そこでランチルームを有効活用するために、畳などを敷いてリフォームし、地域の未就園児のプログラムや日常の保育の場として多目的に使用していこうと考えました。こうした施設の活用案は、コロナ禍がなければおそらく考えなかったことです。コロナ禍でできなくなったこともありですが、ある意味、より良い園へ飛躍するための一つのきっかけを与えられたのだと捉えています。以前の状態に戻すという考えから離れて、これからの時代に合ったものを新たに創っていく発想が今は大切なのではないのでしょうか。食育についても取組みの視点を少し変えて、飢餓や残食（フードロス）なども子ども達と考える時代ではないかと思っています。

どんな時にも園が軸とするのは関東学院の理念に基づいたキリスト教保育です。教職員一同がその理念を共有し、キリスト教保育を基軸として未来を創る人格教育をする園であって欲しいと願っています。

コロナ禍をより良い環境作りへのステップに子どもにとって本当に必要な園生活や節目とは何か、自問しながら歩んだ経験を次年度に活かします

皆で作り上げる新しい園生活

新型コロナウイルス感染症への対応を協議し始めたのは、副園長を務めていた昨年初頭からです。4月1日に保育の子ども達の入園式と進級式は縮小して実施したものの、後日予定していた1号認定の園児達の入園式等は中止となり、徐々に緊張感が高まる中で今年度をスタートしました。その後も日に日に状況が悪くなる中、横浜市からの要請もあり、5月には医療関係等に携わるご家庭以外は登園自粛をお願いするに至りました。保護者との親睦を深める行事も次々中止となり、先が見えない不安が正直ありました。

教職員も半数ずつ交代で自宅勤務となりましたが、私自身は4月に園長に就任したタイミングで、ある意味ゆつくりと今までの保育について振り返ったり、子どもの大事な節目について考える時間をいただいたのだと前向きに捉えるようにしました。それは他の教職員も同様でしたが、5月半ばになると「やはり園に行って仕事したい」という思いが皆強くなってきます。そこで学院全体が6月から再始動するのに合わせて、私達も園再開に向けて準備を始めました。教職員達も活気づき、皆で一緒に子ども達について考えることがどれほど大きな力に

なっていたかを思い知らされました。

6月から始まった分散登園では検温カードを作って体調をチェックし、段階的に登園人数や在園時間を増やしながら給食やお弁当も再開しました。こうして十分なウォーミングアップ期間を経て7月からは通常通りの体制に戻しています。園の大事な活動である「子育て講演会」も再開しました。7月と9月は参加者を在園の保護者に限定しましたが、10月からは従来通り地域や一般の方にも開放して実施しています。

子ども達がマスクをし続けることは難しく、何度も着け直すことはむしろ不衛生ですので、着用のお願いはしていません。その代わりに手で触れる部分はおまめに消毒したり、うがいや手指消毒の指導、換気を徹底して感染防止に努めています。これらはインフルエンザ対策として以前から行ってきたことであり、幸い今まで園内でインフルエンザが流行したこともありません。

コロナ禍でも非日常の体験を

子ども達が元気な日常を取り戻すことをうれしく思う一方、非日常的な体験としての行事の重要性を考え、秋に大学のキャンパスを利用した遠足を実施しまし

た。年少クラスは六浦キャンパスから室の木キャンパスへ歩いて芝生でお弁当を食べたり、年中クラスはバスで横浜・金沢文庫キャンパスに行つて森の中で虫やどんぐりを見つれたり、さらに年長クラスは園内でお泊まり会を実施して、キャンパス内で美しい葉っぱや十字架を探したりしました。感染リスクを考えると園外での活動が難しい中、身近な場所でも子ども達にとっては本当に楽しく大きな冒険です。特に年長クラスはお泊まり会後に大きな成長が見られ、節目としての行事の大切さを改めて実感しました。

保護者の方々には、子ども達をこの園に通わせてくださることに心から感謝をお伝えしたいです。園としては、ここが絶対に安全ですと言うことはできません。リスクはありますが、それを最小限にする対策と細心の注意を払っていることを伝え、保護者の方々がそれを理解した上で「子どもにとって必要だから来ています」と言っていただけのような関係構築を築ければと思っています。そのために子ども達にとってより良い環境を提供し続けなくてはなりません。コロナ禍は新年度以降も続くでしょうが、この1年間私達が経験したことを活かし、一つひとつ吟味しながら取り組みたいと思います。



関東学院六浦こども園 園長

鈴木 直江

関東学院女子短期大学幼児教育科卒業後、関東学院幼稚園に教諭として着任。2016年に六浦こども園副園長に就任。2020年4月より関東学院六浦こども園 園長。



関東学院のびのびのば園 園長

井上 恵子

明治学院大学文学部卒業後、母校である関東学院中学校高等学校の英語科教諭として着任。2011年NPO法人クオリティワールド理事長を務める。2016年より関東学院のびのびのば園 園長。



広報から

2020年初頭から世界中で猛威を振るっている“新型コロナウイルス”。感染拡大防止のための外出自粛や緊急事態宣言、新しい生活様式の推奨など、私たちを取り巻く環境や生活は激変しました。教育機関もその例外ではなく、学校教育のあり方について転換が求められ、関東学院各校でも学生や生徒、子ども達の「学びの場」を守るため、様々な取り組みを行ってきました。今回の「OLIVE SPIRIT No59」では、コロナ禍においても決して揺らぐことのない学校法人関東学院の教育に対する姿勢や精神をお示するとともに、日々刻々と変化していく状況の中で、柔軟かつ迅速に講じられてきた各校の対策と、学校長の教育や子ども達に対する想いを一冊に綴りました。

関東学院大学 広報課 (045) 786-7049 / kouhou@kanto-gakuin.ac.jp

冊子内の記事は、2020年11月に取材されたものです。

学校法人

関東学院

〒236-8501 横浜市金沢区六浦東1-50-1

法人事務局 ☎045-786-7028（代）

<https://www.kanto-gakuin.ac.jp/>